

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

| | |
|--------|-----|
| 都道府県番号 | 17 |
| 都道府県名 | 石川県 |

()

・学校名及び規模

| | | | | | | | | | | |
|------------|----|-----|----|----|----|----|----|-----|-----|--|
| 金沢市立西南部小学校 | | | | | | | | | | |
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特学 | 計 | 教員数 | |
| 学級数 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 20 | 27 | |
| 児童数 | 97 | 116 | 98 | 95 | 93 | 94 | 4 | 597 | | |

・実践研究の概要

主題 「今を生きぬく子をめざして」

主題設定の理由

今年度は新学習指導要領の全面実施の年にあたり、同時に完全学校週五日制が実施された。新しい教育が始まろうとしている今、自らが課題を見つけ考え自分で解決していく力や、社会の中でよりよく生きていくための力を育てていくことがますます重要になってきている。数年来、これらの力の育成をめざし、学校や地域の人たちと心をつなぎながらたくましく生きぬいてほしいという願いから、研究主題を上記のように設定して研究を進めてきている。

「今を生きぬく力」の根本は「主体性」と「創造性」にあるととらえている。しかしそれらの成長を支える根底には、基礎的な学力の確保が不可欠であることは言うまでもなく、児童が授業内容をよく理解でき、学習が楽しいと実感できることが大前提にある。「わかる」喜びは学習への主体性につながり、主体的な学習から創造が生まれると考えている。こうした取り組みを進める中で、人や事物・事象を豊かに感受する心の育成も可能になると考える。本校の取組は、教科の基礎基本の定着を核としながらも、わかる授業を通して心の充実を重んじ、主体的・創造的な子どもの育成を目指すものである。

特に今年度よりフロンティアスクール事業に参画し、確かな学力を身に付け、自ら学び考える子を目指すために、指導方法・指導体制の工夫改善を中心に取り組んでいる。

・実践研究の内容について

(1) 研究体制の工夫

学力面の基礎・基本の定着は「今」に限らず、教育の普遍的な目標である。しかしながら、昨年度の子供たちの意識調査によると「勉強が分からない」「学校が楽しくない」と回答する者も少数ではあるが存在することは事実である。これは基礎的な学力が十分に定着していないため学習内容が分からなくなり、ひいては「学校が楽しくない」状況に陥る場合が少なからずあるのではなからうか。全ての子ども達が、自己の能力に応じて少しでもその可能性を広げ、「今を生きぬく力」をつけるために、今一度、学力面の基礎・基本の充実に焦点をあて研究を進めることが急務であろう。

また、指導と評価の一体化という観点に立ち、指導に生かせる評価のあり方を考えていくことも重要である。

以上に述べたことから、研究主題ならびに学力向上という目標に迫るために、今年度は以下のような視点を設定し研究を進めてきた。

視点1・・・子どもの願いにそった、わかる授業づくり

子どもの願いは多種多様である。しかし共通する大きな願いの一つは「わかりたい」という願いではなからうか。「わかる」ためには基礎・基本の定着は不可欠である。基礎・基本を重視した、分かる授業を構成すれば、子どもの願いに応えることができる考えた。「わかる」学習体験を繰り返したり、積み上げることによ

て学んだ力を連続的につなぎ合わせる力をつけ、知恵にまで発展させれば、主体的・創造的な子どもを育成することができるのではなからうか。
そのために、題材、単元構成、機器の使用等を含めた授業設計全面からわかる授業づくりをめざす。

視点2・・・一人一人が確かな基礎学力を身につけるための指導と評価の改善
子どもたち一人一人の願いに答えるために、これまでの授業形態の枠にとらわれることなく、新たな指導の在り方を模索する。それとともに今までの評価のあり方を見直し、総括的評価にとどまらず、日々の指導に生きる評価のあり方を考えていく。また、学年末に身に付いた教科の学力を調査したい。
量より質を問われる時代に、指導の質を高めるための可能性を探る。

(2) 実践研究の内容

教科担任制への取り組み

高学年（6年生の算数・社会・体育及び5年生の国語・社会・体育）で取り組んできた。授業者の得意分野を生かした質の高い授業づくりを目指すとともに、学年の児童を協力して育てるという児童理解的・生徒指導的な効果にも視点を当てて研究を進めてきている。

TT指導への取り組み

4・5・6年の理科で取り組んできた。理科専科と学級担任が協力して授業改善を目指した。基本的には、専科はその専門分野を生かして授業設計にとりくみ、学級担任は学級づくりの観点から授業に臨んでいる。その他、2人の指導者によるよりきめ細かな視点から評価活動を行い、指導と評価の一体化を図ろうと考えている。

少人数指導への取り組み

低・中学年の算数で、週に1～2時間の少人数指導に取り組んできた。TT指導もあわせて実践する中で、少人数の指導法や形態の工夫を考え、時間割・指導内容等を含め、効果的な方法を探っている。

(3) 成果と課題

教科担任制への取り組みについて

ア.児童の意識調査より

- ・8割の子どもたちがよいと捉えている。5年生（83%）6年生（87%）
- ・よいの内訳...他の先生と出会える 授業がわかりやすい
- ・よくないの内訳...先生ごとに進め方がちがう 授業がわかりにくい なれない先生で話にくい
- ・宿題の量と家庭学習は共に7割が増えたと感じている。
- ・内容がわかるようになったと9割が捉えている。

状況を踏まえて

- ・ほとんどの子どもたちは教科担任制を肯定的に捉えている。
- ・授業の内容がわかるようになったと良い変化を感じていることは喜ばしい。

イ.教師の意識調査より

- ・教科担任制については、教科担任全員がよいと捉えている。
- ・様々な観点から（よい点・悪い点）生の声が出されている。

状況を踏まえて

- ・教科担任制のよい面としては、生徒指導上の面からは学年全体の子どもたちを複数の教師で見ることができ、また、教科指導の面では深い教材研究が可能で、学年の児童に同じ学習体験をさせることができ、教材も効率的に使えるよさあげられている。また指導力の向上にもつながっていることなどが伺える。
- ・問題点としては、学級の個人を見る時間が減少することや時間割に弾力的な保障がないこと、教材研究や教師間の打合せの時間の確保が難しいなどがある。
- ・教科担任制のよさは教師も十分捉えているので、今後少しでも問題点を改善し、人的整備での加配を要望していきたい。

ウ.保護者の意識調査より

- ・実施していることをほぼ全員が知っている。(95%)
- ・教科ごとにかかわることについては、9割はよいと捉えている。
- ・よい理由...教科の専門性を生かした指導ができる。多くの先生と交流できる。学年全体を見た評価ができる。中学校の教科担任制に慣れることができる。同じ内容で差がなく指導してもらえる。など
- ・悪い理由...小学校の間は、子どもをよく理解している学級担任に持ってもらいたい。学級担任とのふれあいの時間が少なくなる。など

状況を踏まえて

9割がよいと捉えていることが分かった。よいという回答の理由は教師の専門性を生かした指導を期待していることが分かる。悪いと回答した理由は学級担任とのふれあいの時間が減ることの不安である。また、教師間の情報交換を密に図って欲しいとの要望もあり、保護者の関心の高さがよく理解できる意識調査であった。

TT指導への取り組みについて

ア.児童の意識調査より

- ・複数の指導者がいるために、実験操作の不安が少なくなったという回答が得られている。また、分からないことをいろいろ聞き易くなったという利点も感じている。
- ・反面「いつも見られているようで窮屈」と感じている回答もあった。

イ.教師の意識調査より

- ・複数の教師による机間指導により、実験操作や表現活動等技能面の基礎学力の向上があげられ、レポートや発言内容からも支援による思考の深まりが見られる。
- ・教師間の打ち合わせ時間の確保が困難なため、全体で思考を深める場面での双方の役割分担を臨機応変に行うことが難しいと感じている。
- ・教科担任制との絡みで、理科がTT指導に固定されてしまうと、教科担任で行う他の教科が限定されてしまう。そのため時間割に柔軟性がなくなり多くの場面で支障をきたす場合が生じる。

ウ.保護者の意識調査より

- ・安全面での効果を評価される場合が多い。また複数の教師の目によるより客観的な評価と支援を期待する声が多い。

少人数指導への取り組み

意識調査は行っていないが、今年度1月中旬に行った算数の学力テスト(1~5年で実施)の結果を見ると、観点別評価項目の「技能」面で、他の項目よりも相対的に高い数値が全ての学年で認められた。少人数指導の効果が徐々に現れてきたのではないかと期待しているが、詳しい分析を行いたい。

(4) 成果の普及方策

今年度の校内研究会(全体授業研究会)を全市に向けて公開している。今後もこのような方法を発展させ、授業研究の成果を公開していきたいと考えている。また、文書等での公開、学校ホームページでの公開も同時に行っていく。

(5) その他

- ・評価の改善
評価計画にのっとり、評価規準・基準の作成と改善、評価方法の工夫と改善、評価にもとづく指導の工夫と改善等、より指導と評価の一体化を目指したい。